

清盛と楠

KIYOMOLI with camphor tree

平成 24 年

8・29 [水] - 10・22 [月]

開館時間 九時～十六時半

休館日 九月二十五日 [火]

お問合せ 式年遷宮記念せんぐう館

〒五一六―〇〇四二

三重県伊勢市豊川町前野一二六一

TEL 〇五九六―二二―六二六三

<http://www.sengukan.jp/>



平成二十四年度企画展

清盛と楠

はじめに

この企画展では外宮の表参道にあります「清盛楠」を取りあげて、平清盛と関わりある神宮や三重県の史跡・逸話なを紹介します。また常設展では、御装束神宝の調製過程や御正殿の造宮の展示を致しております。

式年遷宮において新しくして捧げられる御装束神宝や御正殿には古墳・奈良時代から引き継がれた意匠や技法を基に、新たに平清盛の生きた平安時代に生み出されたニュー・モードを付加しており、崇敬心を「より良い」奉納物に寄せて大御神に捧げられたことを窺い知ることができます。

これら平清盛の参宮や事績を知ること、日本人の神宮に寄せる思いについて考える機会となれば幸いです。

平成二十四年八月二十九日

式年遷宮記念せんぐう館

目次

凡例

ごあいさつ

目次

一、伊勢平氏の台頭

二、平清盛・重盛の参宮

三、平家の衰退と源頼朝の崇敬

関連年表

展示資料一覧

主要参考文献

・この図録は平成二十四年八月二十九日から十月二十二日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展「清盛と楠」に際して作成したものである。

・図録の資料番号と展示資料番号とは一致するが、展示順序を示すものではない。

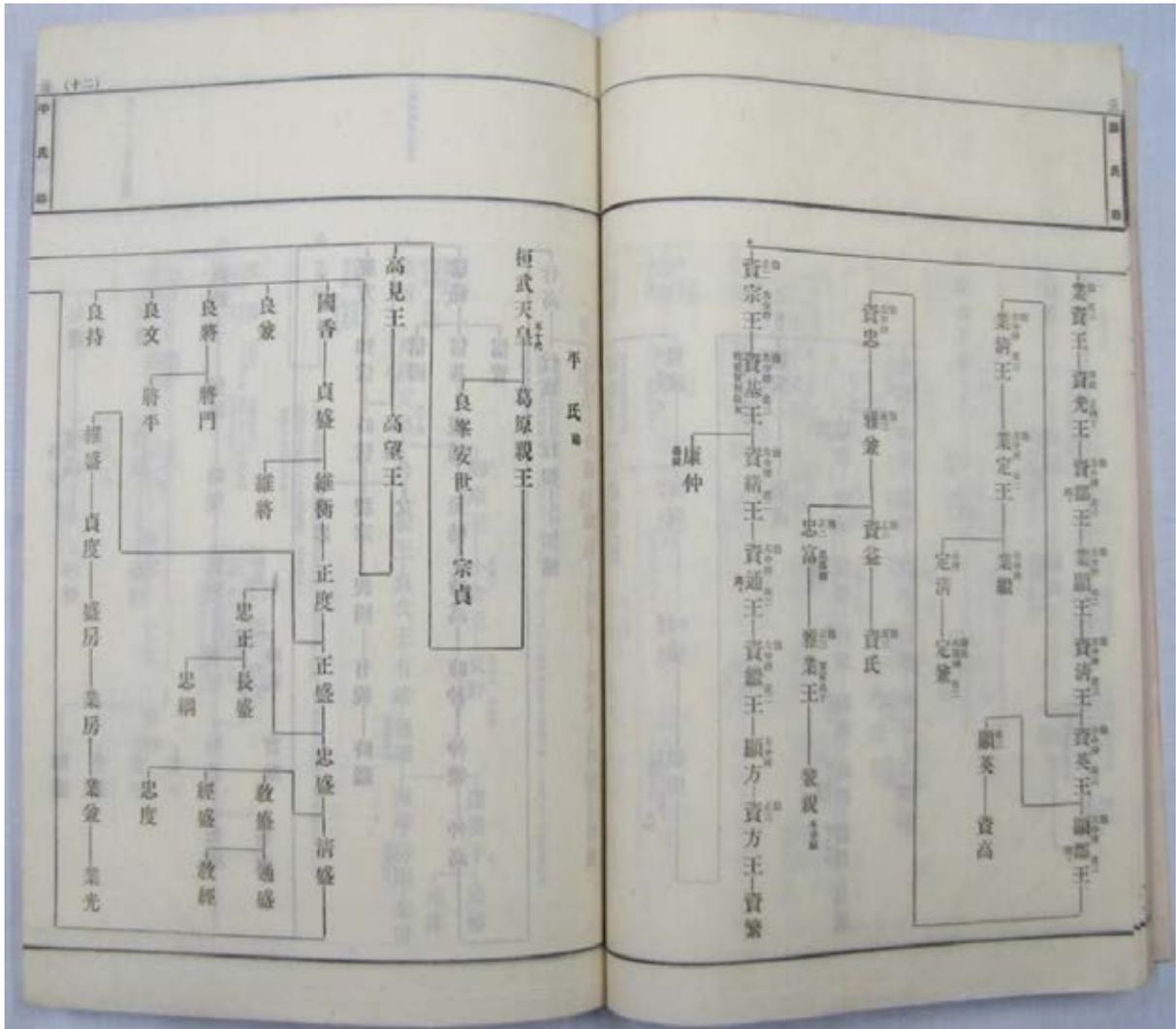
・展示資料の写真は当館が撮影した。

・本書の編集・執筆は芝本行亮があたった。

一、伊勢平氏の台頭

平氏は平安京に遷都した桓武天皇の曾孫、高望王が「平」の姓を賜って臣下になった名族である。平安時代中期、伊勢国に來住して勢力を伸ばした一族を「伊勢平氏」と呼んでいる。平清盛を輩出した系統は、都に進出して政權を掌握するに至ったことから、「伊勢平氏」の主流として「平家」と呼ばれている。平正盛は伊賀国北部を本拠地とし在地有力者を従えて所領の拡大を図り、白河上皇の知遇を得て院の北面武士に登用されて京への進出を果たす。正盛の嫡男忠盛も父と同じく白河上皇に寵遇されて昇進し、武家として「殿上人」となる。また瀬戸内海の高賊を追捕し、西国の受領を歴任するなどして、西国の武士を掌握し、源氏と並ぶ武家の棟梁となった。

忠盛の後継である清盛は、異例の出世を遂げたが、その背景には白河上皇の実子という、清盛の出生の秘密があるとも言われている。清盛は、父祖以来の財力と伊勢国の地盤に加えて、日宋貿易の利益や西国の受領歴任により、西国武士団を武力として保持して政治力を高め、保元・平治の乱を勝ち抜いて、平家の全盛を築いた。



① 『尊卑分脈』

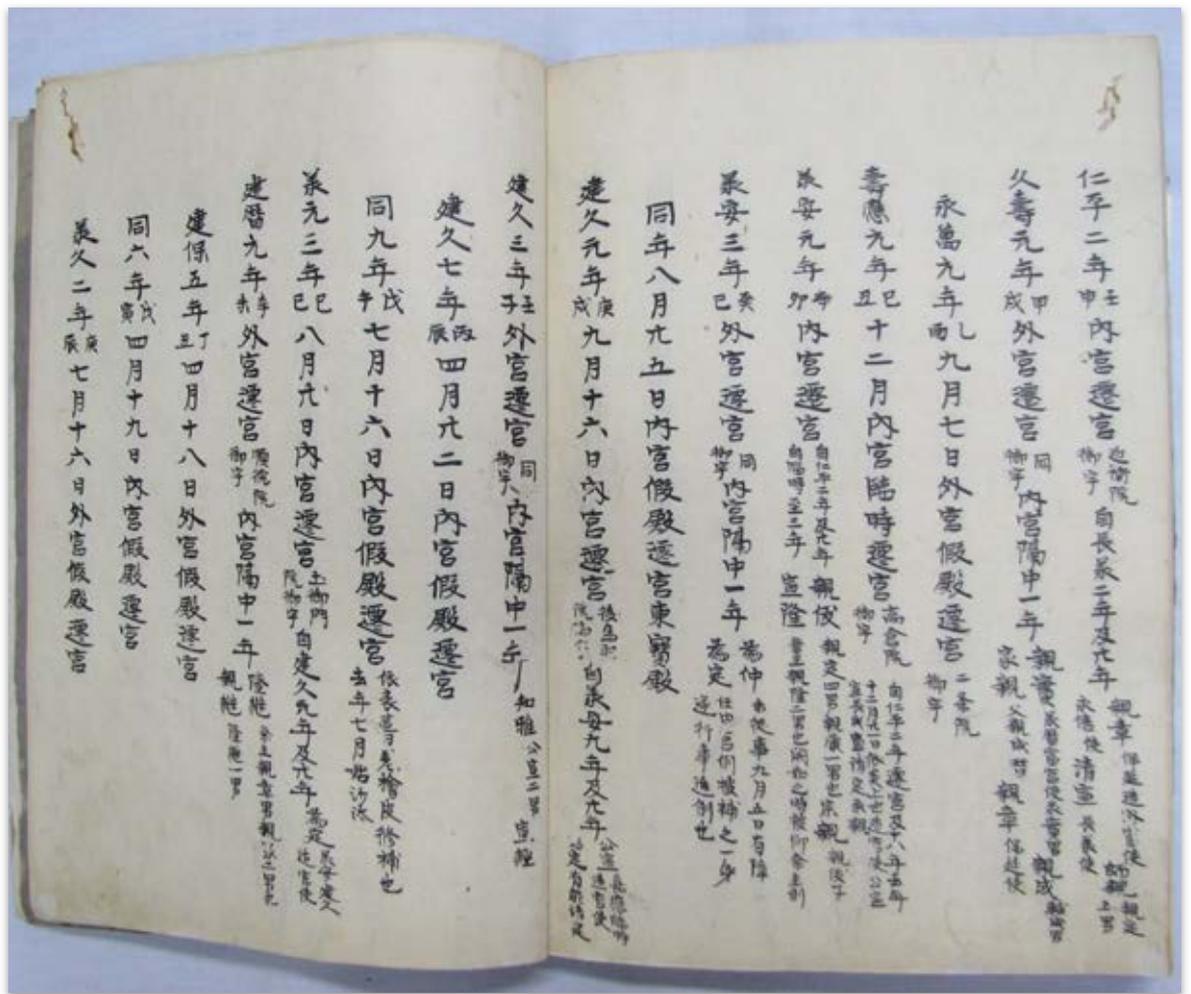
神宮文庫蔵

縦二十七・〇cm×横十九・〇cm

明治三十六年（一九〇三）刊

『尊卑分脈』は姓氏家系の書籍で、成立は吉野・室町時代。洞院公定により永和三年（一三七七）から応永二年（一三九五）にかけて編纂され、その後も養子である満季、孫の実熙といった洞院家の人々によって書き継がれた。源平藤橘四姓の父系を結んで人物の名を書き、官歴・没年月日と享年を含んだ略伝が記されている。

平氏は桓武天皇の曾孫高望王が「平」の姓を賜った名族であり、はじめ東国に勢力を置いていたが、平将門の乱（九三五〜九四〇）・平忠常の乱（一〇二八）以降、東国は源氏の地盤となり、平維衡は伊勢国に來住して勢力を伸ばした。この平維衡の一族を「伊勢平氏」と呼び、中でも平清盛を輩出した一族は、都に進出して政權を掌握するに至ったことから、「伊勢平氏」の主流「平家」として広く認識されている。



② 『二所太神宮例文』

神宮文庫蔵

縦二十七・〇cm×横十九・五cm

寛文七年（一六六九）黒瀬益弘写

『二所太神宮例文』は齋内親王・祭主・禰宜の補任及び叙位、式年遷宮・臨時遷宮・仮殿遷宮や公卿勅使に関する二十六項を設けて年代順に記し、鎌倉時代後期に成立して、それ以降も書き継がれている。

本書の「第二十六、二所太神宮正遷宮臨時並仮殿遷宮」によると、平清盛が活躍した平安時代には第二十三回から第二十七回の五回の遷宮が行われている。内宮は永久二年（一一一四）・長承二年（一一三三）・仁平二年（一一五二）・承安元年（一一七一）・建久元年（一一九〇）。外宮は永久四年（一一一六）・保延元年（一一三五）・仁平四年（一一五四）・承安三年（一一七三）・建久三年（一一九二）である。

内宮の式年遷宮が行われた二年後に外宮の式年遷宮が行われているが、これは第一回の式年遷宮を内宮が持統天皇即位四年（六九〇）、外宮が二年後の同六年（六九二）に始まっていることによる。内宮・外宮を同一一年に行われるのは織田信長・豊臣秀吉による天正十三年（一五八五・第四十四回）の式年遷宮からである。また平安時代の式年遷宮は神嘗祭の日に行われており、内宮は九月十六日、外宮は九月十五日に遷御の儀が行われた。



③ 「平氏発祥伝説地」

三重県指定史跡 三重県津市産品所在

昭和十四年（一九三九）三月二十五日指定

三重県津市産品は平氏発祥伝説地とされ、平清盛の父である忠盛

が産まれたときの胞衣を埋めた「忠盛塚」と「産湯池」が残され

ている。「忠盛塚」には神宮禰宜岡吉胤撰文の「平忠盛公之碑」

が明治三十三年（一九〇〇）十二月に建てられ、「平刑部卿忠盛
公誕生塚」と「産湯池」の標柱がある。



④ 「平清盛幕張松古蹟」

宮川の氾濫を防ぐために平清盛が築いた大堤「清盛堤」の跡。田嶋の削平に伴い堤の高まりがなくなり、わずかに外宮の摂社大間国生神社の北境に痕跡をとどめるにいたったとされるが、現在はJR山田上り駅前石碑が残るのみとなっている。石碑には「平清盛幕張松古蹟」と刻まれており、幕を張ったように松林が連なる堤であったことが名称からうかがえる。



⑤ 『平治物語絵詞』 「六波羅行幸巻」

神宮文庫蔵

縦四十二・五cm

江戸時代写

平治の乱を描いた絵巻物。平治の乱は後白河上皇の近臣間の争いに、源平の武家の対立が絡んだ兵乱。平治元年（一一五九）十月九日、平清盛が熊野参詣により不在であることを幸いとして、藤原信頼は源義朝と結んで後白河上皇の三条殿を夜襲し、上皇を大内裏（御所）に拉致。信頼は内裏において藤原信西（通憲）の一族の追捕と除目を行い、十二月十日には義朝の軍勢が信西の宿所を急襲した。信西は伊賀国まで逃れるが、自害して果てる。事件の急報により清盛は武士を集めながら帰京し、十二月二十五日に六波羅の屋形に着く。二条天皇は夜陰にまぎれて密かに御所を逃れて六波羅の清盛邸に行幸する。場面は二条天皇の御車を、平家の軍勢が護送して六波羅の清盛邸へ向かうところ。二条天皇を乗せた御車の後ろに騎乗の公卿は前に新大納言藤原経宗、別当藤原惟方。甲冑を着けて白馬に跨がる武将が平重盛（清盛嫡男）。後方で兜の緒を締めているのが平頼盛（清盛弟）であるとされている。



⑥ 『天子撰関御影』 「大臣卷 清盛公」

神宮文庫蔵

縦二十八・四cm

コロタイプ複製（原資料宮内庁蔵）

平安時代末期から鎌倉時代末期までの天皇・摂政・関白・大臣の肖像を年代順に描いたもの。天子巻に二十一人、撰関巻に三十人、大臣巻に八十人、合わせて一百三十一人が描かれ、三つの巻物に仕立てられている。

絵は藤原為信・豪信の親子が描き継いだものとされており、

鎌倉時代に描かれた肖像を特に「似絵^{にせえ}」と呼ぶ。「似絵」

は目・鼻・口などを、その人物の顔貌に似せて写実的に描いた絵のことを意味する。

大臣巻にみえる平清盛は宮中行事に臨む場面で、冠をかぶり、束帯姿で描かれている。強装束である黒い袍に、腰には飾太刀を佩いて、手には笏を持っているが、飾太刀・笏・平緒・裾は白く塗り残している。一方で、顔の表情には重点を据えて描かれており、太い眉に、目尻が吊り上って、ふっくらと豊かな頬を描いて彩色されている。



⑦ 『平治物語絵詞』 「六波羅合戦巻」

神宮文庫蔵

縦四十二・〇cm

寛政五年（一七九三）写

本図は略模本の一巻で、すべて白描はくびようの粗笨そほんである。

江戸中期には原本を失っていたが、いくつかの模本が伝わっている。

平治元年（一一五九）十二月二十六日、平清盛は弟頼盛・子重盛を大内裏に向かわせて藤原信頼を討たせた。一方、藤原信頼の軍勢により六波羅が襲撃されるが、清盛はこれを迎え撃ち、なおかつ攻め出て三条河原まで追撃し、源義朝・義平を敗走させる。場面は義朝の嫡男義平の軍勢を迎え撃つ清盛の様子を描く。『平治物語』には「かちん（襦）の直垂に黒糸威の鎧に、黒漆の太刀はき、くろづはの矢をい、塗籠藤の弓をもって、黒の馬に黒鞍をかせてのり給へり」と清盛の軍装を記している。

一、平清盛・重盛の参宮

平氏は伊勢国を本拠地としたことから、勅使・齋王参向の際には、接待・饗応役を勤め、鈴鹿駅家・一志駅家や参宮街道の拡張整備を行った。神宮との関係は他の公卿とさほど変わることもなく平清盛・平重盛いずれも公卿勅使として神宮に

参向するにとどまっている。これは平家が公家の慣例に従い「私幣禁断」の制を厳守していたことによる。清盛は三度、重盛は一度勅使を勤めるが、いずれも宸筆を奉じての公的参拜で私幣私願はなかった。また清盛は、娘である中宮徳子の皇子御降誕御祈のために神馬を牽進することもあったが、これも皇室との関係に立っての公的な奉納と言える。

平家に因む事蹟としては外宮表参道火除橋際に、長寛三年（一一六五）に勅使として参宮した平重盛の冠が触れるとの理由で枝が切られた「清盛楠」がある。また、かつては外宮西側を流れる宮川の氾濫から外宮と鳥居前の山田の町に住む住民・住家を守るために平清盛が築いた堤防があつたが、現在は「平清盛幕張松古蹟」の石碑が残るのみである。一方で平家の崇敬は熊野三山や厳島神社に向けられ、折にふれて参詣もなされた。特に厳島神社は平清盛が安芸守に任じられて赴任して以降、家門の繁栄に伴う神威への奉謝には情切なるものがあり、殿舎の建立・神宝・経巻の奉納、屢々の参詣がなされた。



⑧

「清盛楠」

豊受大神宮神域

「清盛楠」は樹幹四本からなる。

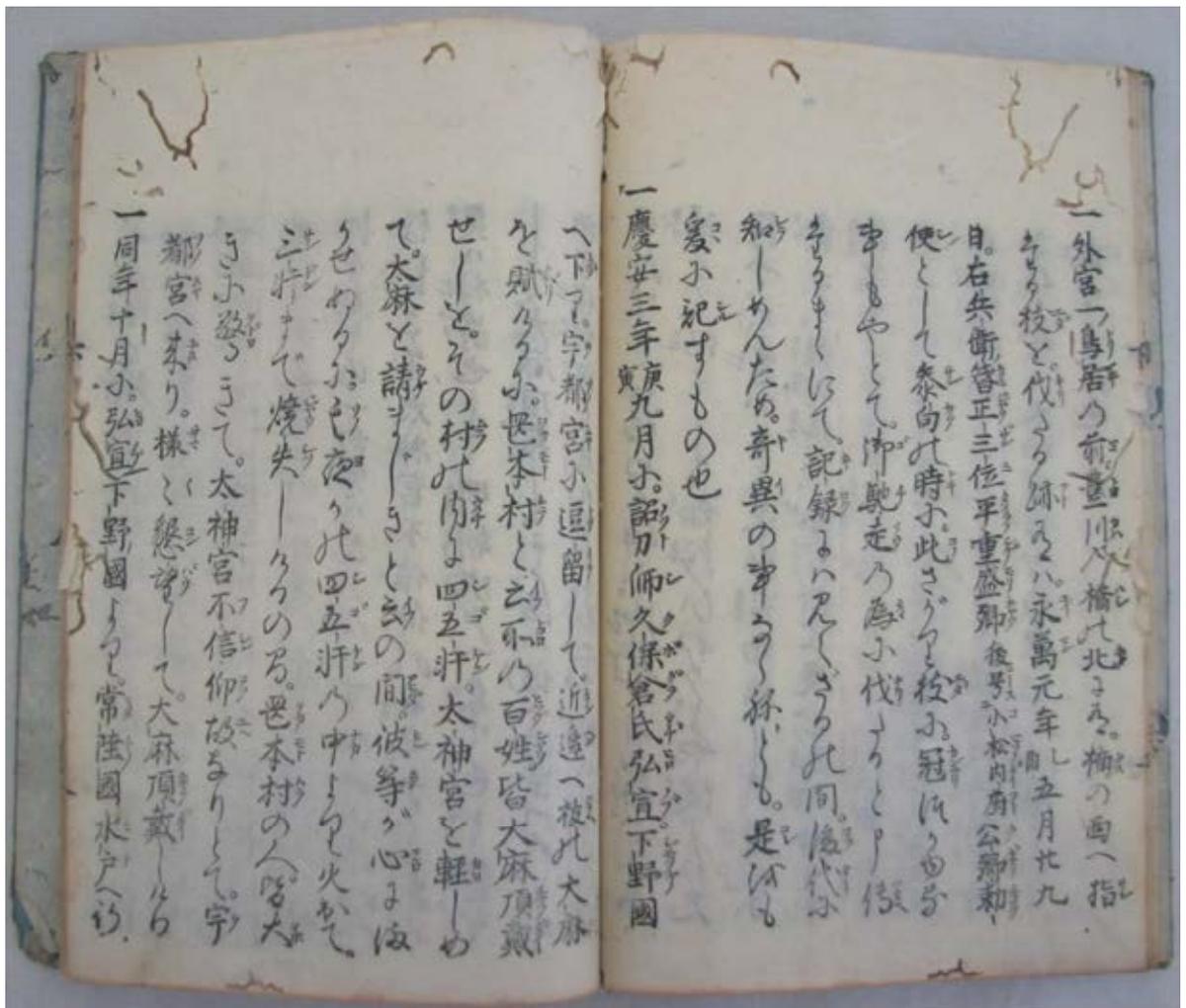
樹齡 一千数百年

樹高 十二メートル

胸高周囲 三五七センチ

樹幹直径 一一三センチ

樹冠長枝 九五〇センチ



⑨ 『伊勢太神宮神異記』

神宮徴古館蔵

縦十七・五cm×横二十七・〇cm

寛文六年（一六六六）刊 出口延佳著

『伊勢太神宮神異記』は外宮権禰宜出口延佳が内宮・外宮における靈驗なる神異・奇異を記した書籍で、寛文六年（一六六六）に上梓された。外宮の楠については次のように記されている。

「一、外宮鳥居の前、豊川の橋の北に有楠の西へ指たる枝を伐たる跡有は、永万元年乙酉五月廿九日、右兵衛督正三位平重盛卿、後に小松内府と号す、公卿勅使として参向の時に、此さがり枝に冠つかゆる事もやとて、御馳走の為に伐りたると申伝たるまゝにて、記録には見えざるの間、後代に知しめんため、奇異の事ならねども、是をも爰に記すもの也」



⑩ 『伊勢参宮名所図会』

神宮徴古館蔵

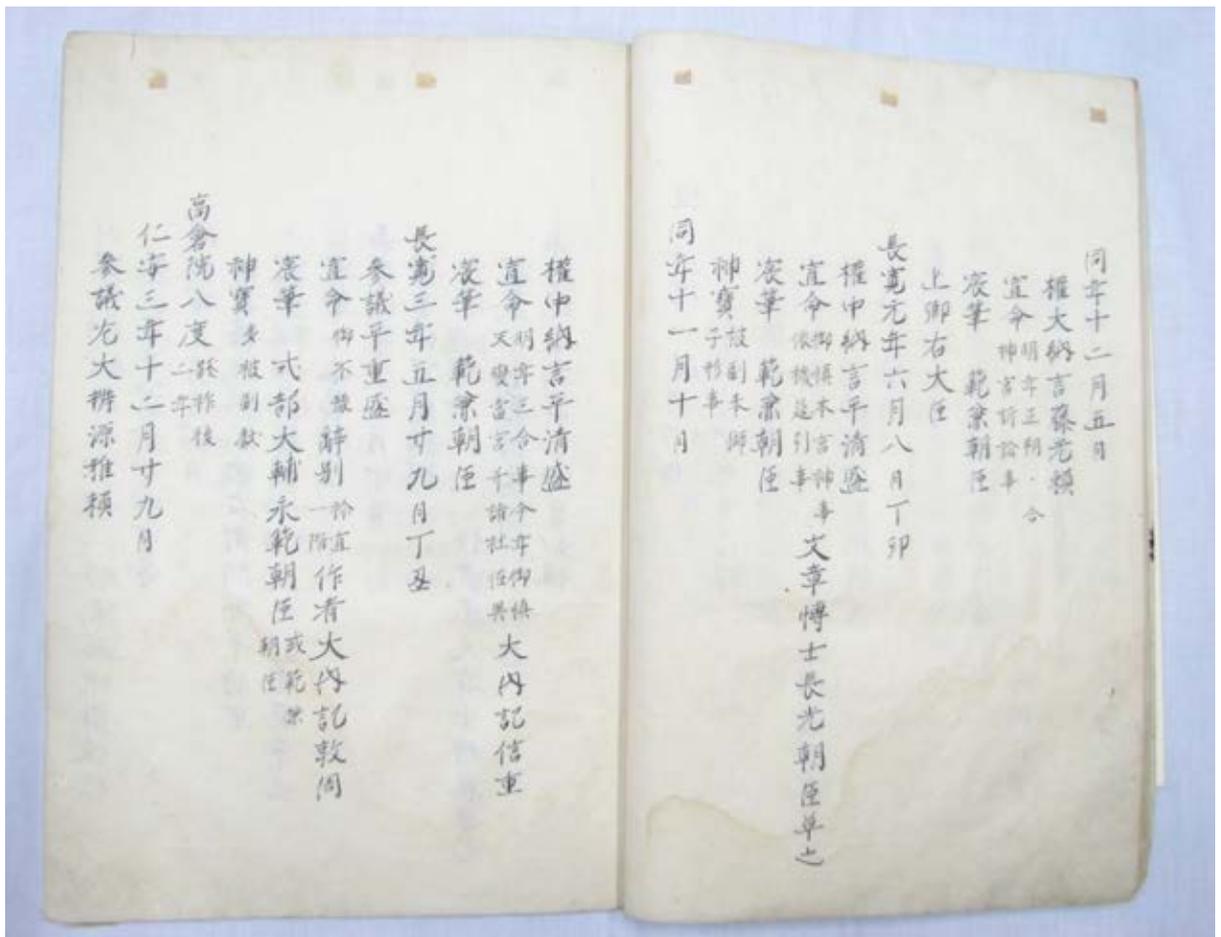
縦二六・四cm×横一八・四cm

寛政九年（一七九七）刊

『伊勢参宮名所図会』は京都の三条橋から伊勢街道を経て皇大神宮・豊受大神宮に至るまで、二見浦・伊雑宮・鳥羽を含めて名所・旧跡を絵入りで解説した参宮案内記で、五巻と附録一卷からなる。

寛政九年（一七九七）に神宮祭主藤波季忠すえただが序文を寄せて上梓し、画・文ともに大坂の画家部関月が著している。「清盛楠」の解説は次のように記されている。

「清盛楠 昔小松内大臣重盛公勅使として参向の時、冠にさはるべしとて、西へさしたる枝を伐らせられし事有。これを里俗あやまりて清盛楠といふなるべし。勅使として清盛公三度、重盛公は一度参向ありし由は勅使部類例文等に見えたり。」



⑪ 『伊勢勅使部類』

神宮文庫蔵

縦二十七・四 cm × 横十九・五 cm

元禄四年（一六九一）出口延経写

『伊勢勅使部類』は聖武天皇の天平十年から後醍醐天皇の嘉暦三年に至るまでの神宮に差遣された公卿勅使が記された記録。成立は鎌倉時代前期で、それ以降も書き継がれている。

内容は公卿勅使の発遣日、勅使の官位と姓名、宣命の趣旨、宸筆宣命の有無、宣命の作者と上卿の官名が記されている。神宮に勅使が遣わされるのは、二月の祈年祭・六月の月次祭・九月の神嘗祭・十二月の月次祭の四度。四度の勅使は王・中臣・忌部・卜部の四姓で構成され、これを四姓使という。この四姓使のほか、三位以上の公卿を勅使として遣わすことがあり、これを公卿勅使という。四姓の内、中臣の奏上する宣命のほか、公卿勅使の奏上する宣命、更には格別の叡慮がある場合は特に宸筆を賜ることも屢々あった。記録によると平清盛は永暦二年（一一六一）四月二十二日・長寛元年（一一六三）六月八日・長寛元年十一月十日の三度、公卿勅使として参向し、平重盛は長寛三年（一一六五）五月二十九日に公卿勅使として参向している。

三、平家の衰退と源頼朝の崇敬

源氏は清和天皇の孫、経基王が「源」の姓を賜って臣下になった名族である。清和源氏は摂津・河内を中心に土着し、勢力の伸張をはかった。河内国を本拠におく源義家は白河上皇により院昇殿を許されている。義家卒去後、源氏一族に内紛が起こり、義家の孫、為義は白河上皇の信頼を失い、官位の昇進が見送られて低迷している状況にあつた。そのような時勢の中、源義朝は東国（関東地方）に下向して、父である為義が伝領していた安房国丸御厨に移住し、在地有力者と連携して勢力を伸ばしていった。神宮領である大庭御厨や相馬御厨などの支配をめぐって争い、在地豪族を傘下に収めていった。源氏勢力の基盤が東国となったのはこの義朝の代であり、特に高祖父の源頼義以来ゆかりのある鎌倉のかめがやつ亀ヶ谷に居館を構え、相模国一帯に強い基盤を持った。

源義朝は京に戻って鳥羽上皇に厚遇されて下野守に任じられ、保元の乱には東国武士団を率いて戦功を立てた。しかし、三年後の平治の乱では藤原信頼方に与して敗北し、東国へ落ち延びる途次に謀殺された。義朝と熱田大宮司藤原季範すえのりの娘由良御前との間に生まれた三男頼朝は平治の乱により伊豆国蛭が小島に流されるが、のちに挙兵して平家と奥州藤原氏を平定して鎌倉幕府を開き武家政権を確立した。

源頼朝と神宮との関わりは、頼朝が自らの祈祷を外宮権禰宜わたらいみつとも度会光倫に頼んでいる。願意は国家の安寧という公的なものを含むが、平家追討・源氏再興の私的内容が含まれており「私幣禁断」の範疇を超えている。源頼朝の神宮崇敬はやがて関東御家人に広がり、神宮からも権禰宜・御師による教化活動と相俟って浸透していった。後に室町幕府を開く足利將軍家（清和源氏）の神宮参拝につながる端緒を開いたといえる。

左辨官下伊勢太神宮司

應且任度度宜有傳旨其妨備進供祭物且令國司

舟申子細相模國田所目代源頼清并同義朝郎

從嚴位清原安行恣巧謀計以大庭御厨高座郡

内鵜沼郷俄号鎌倉郡内運取供祭新稻米旁致

激行事

右得祭主神祇大副大中皇清親卿去月十二日解状傳太

神宮祢宜寺同日解状傳伊勢恒吉今月七日解状傳護

素内當御厨者本自荒野地也誠無田畠之由見于國判也而

彼國任人故平景正相割國判寄進太神宮御領之刻永所附

属恒吉也即為御厨令開蓋教備進供祭上分漸痊年序之願就

在廳官人等之浮言國司度度令痊奏聞之處被下宜旨

等於本宮問子細之後全無傷痕論旨之上被問兩代

彼請文殊被下奉免宜旨之日國程兼廳官嚴位平高政同

家紀高成平仲廣同守景朝者幸臨地頭任文書碑四至打修

立券書上其四至云東玉輪庄塊侯野川南海西神佛地北

牧埒者耳寂中高座郡内宇鵜沼郷今俄稱鎌倉郡内寄

⑫

『天養記』

神宮文庫蔵

縦三十・四 cm

天養二年（一一四五）写

国重要文化財 平成十八年六月九日指定

天養元年（一一四四）九月八日・十月二十一日に、内宮の神領で

ある相模国大庭御厨の鵜沼郷に源義朝らが乱入し押領を企てた

ために、内宮祢宜が大宮司・祭主を経て朝廷に訴えた文書写十通を
集めた卷子本。

天養元年（一一四四）九月八日、突如として相模国鎌倉郡に居住す
る源義朝と郎党が大庭御厨鵜沼郷（神奈川県藤沢市大庭）に乱入。

俄に鵜沼郷を鎌倉郡内と称して伊介神社の祝・荒木田彦松と神人八
人を殺害し、内宮の供祭料である稲米を運び取ったため、内宮祢

宜等が朝廷に訴え出た。朝廷は翌年二月三日の官宣旨により義朝の

濫行停止を命ぜられ、三月四日には大庭御厨への妨停止を

命ぜられて内宮側の勝訴となった。『鐙矢伊勢宮方記』によれば、

その直後の三月十一日に義朝は下総国相馬御厨（茨城県取手市・守
谷市一帯）を内宮に寄進している。

寄進型荘園の成立・源氏による関東武士団の成長を知る上で貴重な
史料である。



⑬

『吾妻鏡』

神宮文庫蔵

縦二十七・二cm×横十九・五cm

寛文元年（二六六一）刊

『吾妻鏡』は平安時代末期から鎌倉時代中期にかけて書かれた編纂物。鎌倉幕府の將軍源頼朝から六代將軍宗尊親王までの將軍記で、治承四年（一一八〇）から文永三年（一二六六）までの八十七年間を編年体で記されている。成立は鎌倉時代末期。

養和元年（一一八一）十月二十日の条には外宮権祢宜度会光倫が源頼朝に對面している。度会光倫は頼朝に「去る九月十九日に、平家の意向をうけたに東国平定祈願のための勅使が遣わされ、天慶の例にならって金銅の鎧を奉納した。ところが奉納する前日に、勅使である祭主大中臣親隆の嫡男定隆が伊勢国一志の馭家において頓死する事件があり、これを「朝憲を軽んじ国土を危うくするの凶臣、この時に当たりて敗北すべきの条、兼ねて疑ひなし」と述べて、來るべき平家の敗北を伝えている。

『吾妻鏡』養和元年（一一八一）十月二十日の条

（一一八一）
養和元年十月小廿日 癸亥、昨日、太神宮の権祢宜度會光倫〔相鹿二郎大夫と号す〕、本宮より参着す、是、御祈祷致さんが為、御願書を賜る也。今日、武衛対面し給ふ、光倫申して云はく、去る月十九日、平家の申し行ふに依りて、東国帰往の祈祷として、天慶の例に任せて、金の鎧を神宮に奉らる、奉納以前、祭主親隆卿の嫡男、神祇少副定隆、伊勢国一志駅家に於いて頓滅す、又、件の甲奉納せらるべき事、同月十六日、京都に於いて御沙汰有り、其の日に当たりて、本宮正殿の棟木に、蜂巣を作り、雀、小蛇子を生む、是等の恠に就きて、先蹤を勘るに、朝憲を軽んじ、国土を危くするの凶臣、此の時に当たり敗北すべきの條、兼ねて疑ひ無しへれば、仰せて曰はく、去る永曆元年、出京の時、夢想の告げ有るの後、当宮の御事、渴仰の思ひ他に異なり、所願成弁せば、必ず新御厨を寄進すべしと云々

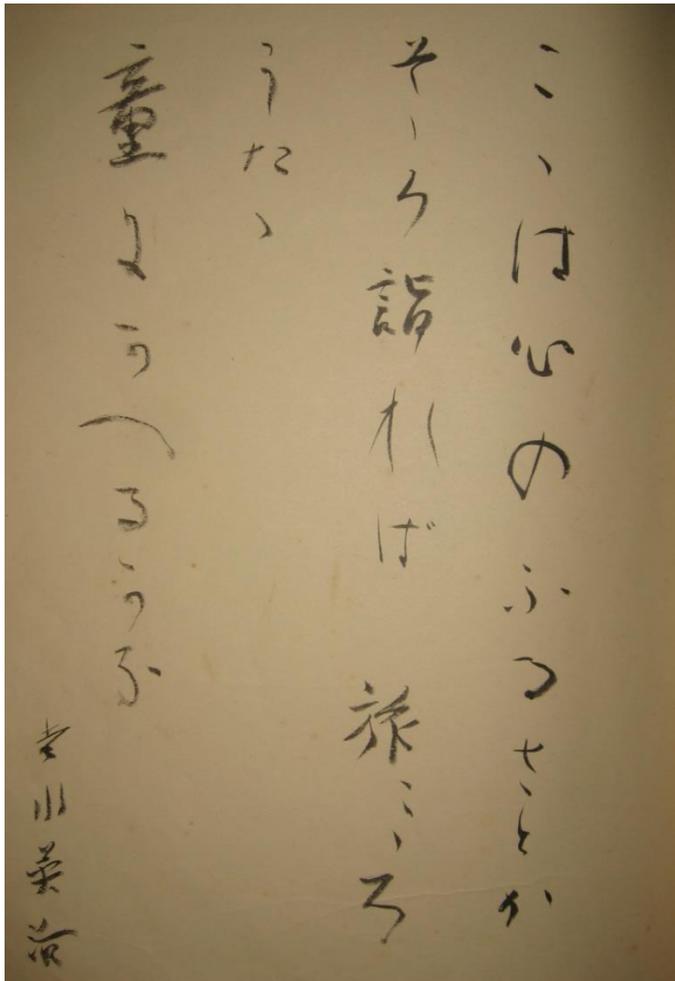


⑭

「勅使塚」

松阪市指定史跡 三重県松阪市曾原町所在
昭和三十七年（一九六二）十一月十五日指定

「勅使塚」は源氏挙兵による兵乱静謐せいひつの勅使として伊勢神宮に派遣され一志駅家で頓死した大中臣定隆おおなかとみさだたかを埋葬した場所といわれている。松阪市三雲みくもの人々は「みかどづか」「みかどさん」と呼び親しまれている。勅使の大中臣定隆は神宮祭主大中臣親隆ちかの嫡子である。この勅使頓死事件は度会光倫により「平家敗北」の予兆として源氏方に伝えられ、意を強くした頼朝は神馬・砂金を神宮に奉り、天照大神の加護を祈念するなど、頼朝の神宮への信仰が次第に強くなる契機となった。



⑮ 吉川英治 書（『神風帖』人）

内宮神楽殿蔵

縦三十九・五cm×横二十九・八cm

昭和二十五年（一九五〇）十二月十日

『神風帖』は内宮神楽殿の参拝記帖で、天・地・人の三帖から成る。

作家の吉川英治は昭和二十五年（一九五〇）十二月十日、『新・平家物語』執筆の為、熊野・伊勢を取材。

その途次に参宮し、内宮神楽殿において記帳している。

こゝは心のふるさとか

そぞろ詣れば 旅ころ

うた

童にかへるかな

吉川英治

展示資料一覽

番号	資料名	時代	法量 (cm)	点数	所蔵先・所在地
①	尊卑分脈	江戸時代	縦二十七・〇×横十九・〇	一冊	所蔵先・所在地 神宮文庫
②	二所太神宮例文	江戸時代	縦二十七・〇×横十九・五	一冊	神宮文庫
③	伊勢平氏発祥伝説地	明治時代			三重県津市産品
④	平清盛幕張松古蹟				三重県伊勢市
⑤	平治物語絵詞 六波羅行幸卷	江戸時代	縦四十二・五	一卷	神宮文庫
⑥	天子撰関御影 (コロタイブ複製)		縦二十八・四	一卷 (三卷の内)	神宮文庫
⑦	平治物語絵詞 六波羅合戦卷	江戸時代	縦四十二・〇	一卷	神宮文庫
⑧	清盛楠				豊受大神宮
⑨	伊勢太神宮神異記	江戸時代	縦十七・五×横二十七・〇	一冊	神宮徴古館
⑩	伊勢参宮名所図会 卷四	江戸時代	縦二十六・四×横十八・四	一卷 (八卷の内)	神宮徴古館
⑪	伊勢勅使部類記	江戸時代	縦二十七・四×横十九・五	一冊	神宮文庫
⑫	天養記	平安時代	縦三十・四		神宮文庫
⑬	吾妻鏡	江戸時代	縦二十七・二×横十九・五	一冊 (二十三冊の内)	神宮文庫
⑭	勅使塚				三重県松阪市曾原
⑮	神風帖 人	昭和時代	縦三十九・五×横二十九・八	二冊 (三冊の内)	内宮神楽殿

主要参考文献

- 部關月『伊勢参宮名所図会』昭和六十二年十一月 国書刊行会
朝倉泰一郎『伊勢の神宮と国民』昭和五十年十月
小松茂美篇『隨身庭騎繪卷・中殿御会図・公家列影図・天子撰関御影』続日本の繪卷十二、平成三年二月、中央公論社
小松茂美編『平治物語繪詞』日本繪卷大成十三 昭和五十二年九月、中央公論社
『伊勢市史』第二卷中世篇 平成二十三年三月、伊勢市
永積安明・島田勇雄校注『保元物語・平治物語』日本古典文学大系三十一、昭和三十六年七月 株式会社岩波書店
藤波家文書研究会編『大中臣祭主藤波家の歴史』平成五年三月、続群書類従完成会
音羽悟「神宮文庫所蔵『天養記』重要文化財に指定される」(『瑞垣』二〇三号 平成十八年五月 神宮司庁)
五味文彦・櫻井陽子編『平家物語図典』平成十七年四月 株式会社小学館
神宮司庁編『神宮史年表』平成十七年三月 戎光祥出版株式会社

平成二十四年度企画展

清盛と楠

編集・発行 式年遷記念せんぐう館

〒五一六―〇〇四二

三重県伊勢市豊川町前野一二六一

ⅴ〇五九六―二二―六二六三

無断の複製・転載を禁じます。



清盛と楠